

県立高等学校教育課程課題研究（国語）

－新学習指導要領における各科目の特性を踏まえた指導の在り方について－

令和4年度から実施される新学習指導要領において、国語科では全ての科目が新設されるとともに、各科目・領域で育成すべき資質・能力がより一層明確に示されることとなった。そこで、本研究では、共通必修科目の「現代の国語」と「言語文化」との比較研究に加え、共通必修科目「言語文化」と選択科目「文学国語」との比較研究を行うことを通して、科目の特性を的確に踏まえた国語科指導や学習評価の在り方について明らかにするとともに、各学校の実情に合わせて活用できる授業実践例を示した。

<検索用キーワード> 高等学校国語科 新学習指導要領 現代の国語 言語文化 文学国語

運営委員長

県立名古屋西高等学校校長 小塩 卓哉(令和元年度)

運営副委員長

県立守山高等学校教頭 加藤 伸夫(令和元年度)

運営委員

高等学校教育課主査 伊藤 君江(令和元年度)

高等学校教育課指導主事 加藤眞太郎(令和元年度)

総合教育センター研究指導主事 戸松 孝至(令和元年度主務者)

研究員

県立春日井西高等学校教諭 亀田 篤(令和元年度)

県立日進西高等学校教諭 松浦 由佳(令和元年度)

県立古知野高等学校教諭 岩本 理恵(令和元年度)

県立岩倉総合高等学校教諭 瀬瀬 由起(令和元年度)

県立豊田南高等学校教諭 三浦千加子(令和元年度)

県立加茂丘高等学校教諭 小辻 輝明(令和元年度)

県立岡崎西高等学校教諭 有馬 彰吾(令和元年度)

県立幸田高等学校教諭 長谷川雄三(令和元年度)

県立刈谷高等学校教諭 森山 怜子(令和元年度)

県立安城高等学校教諭 土屋 豊樹(令和元年度)

県立時習館高等学校教諭 大河 靖知(令和元年度)

県立国府高等学校教諭 杉山 有希(令和元年度)

1 はじめに

昨年度より「県立高等学校教育課程課題研究」は、高等学校教育課と総合教育センターとの共催事業となり、総合教育センターの教育研究調査事業として実施している。総合教育センターで実施され

てきた「教科指導の充実に関する研究」と合流したことで、従来6名であったセンターの研究者も12名に倍増となり、より深く具体的な研究が可能となったと言える。

今年度は、新学習指導要領に向けて、新たに必修科目となる「現代の国語」及び「言語文化」の二科目について、その設置の意義、目標、内容等を踏まえ、単元計画や教材を作成して、効果的な指導の在り方についての研究を行った。さらには、昨年度行った「文学国語」に関する研究も継続しつつ、新学習指導要領における国語科の科目構成を正しく理解し、明確化された学習過程に則した指導の手だてを具体的に提案することをねらいとして研究を行った。また、観点別学習状況の評価に関しては、現行の4観点が「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理されたことを踏まえ、従来の評価の在り方からどのような点を変更すべきかについて論議を重ねた。新たな評価の観点に基づく具体的な授業実践を経て、何度も研究協議を行い、研究成果につなげた。

評価については、平成30年7月に告示された「高等学校学習指導要領解説 国語編」には具体的な記述がまだなく、令和元年の7月に行われた全国高等学校国語科主事会で提供された資料や国立教育政策研究所教育課程研究センターの発行する「学習評価の在り方ハンドブック」等を参考にし、3観点に基づいた評価方法の在り方を研究した。

2 研究の目的

新学習指導要領改訂は、国語科においては非常に大きな変更であることから、科目構成、内容、言語活動例等、学習指導要領のねらいとするところを、正確に把握することが第一の目的である。また、県立高等学校教育課程課題研究会では単元案の充実を従来から大切にしてきた伝統を踏まえ、主体的・対話的で深い学びの視点を取り入れた指導方法の単元化にも留意をした。さらには、授業指導案に加えてパフォーマンス課題、評価用ルーブリック、ポートフォリオの作成例も提案できるよう心掛けた。

3 研究の方法

(1) A、Bの2グループに分け、Aグループは、「現代の国語」班と「言語文化」A班、Bグループは、「言語文化」B班と「文学国語」班とし、グループ別協議、班別協議及び授業実践を通じて、指導計画の検討・授業実践の評価・改善案の作成を行うとともに、それぞれの科目の特色が明らかになるように努めた。

(2) 各班の提案する授業実践事例は、学習指導案を基に実際に授業を行い、その反省を踏まえて改善案を盛り込むことで充実を図った。

4 研究の内容

(1) 「現代の国語」授業実践 <論拠を使って議論しよう>

「現代の国語」は、その目標に「実社会に必要な国語の知識や技能の習得」とあるように、社会において実用的な知識・技能の習得を目指すものである。これは、文化への理解や表現を味わうことを主とする「言語文化」とは、大きく異なっている。また、「話すこと・聞くこと」の指導が重視されている点も、「言語文化」との相違点である。以上のことから、今回は「話すこと・聞くこと」に関わる資質・能力の育成を目指して授業を行った。授業は次の三つの場面で展開した。

①俳句の季語に関する教材文を読み、「話題」「主張」「根拠」の3観点で整理させ、②「論拠」を意識して議論のための主張を整理させ、③以上の材料を活用してグループ同士で議論をさせた。これらの中でも特に、②③の論拠についての理解と活用を授業の焦点とした。

実践を通して、論拠を意識した話し合いの授業では、話し合いの記録とその後の再現の一致具合を見ることで、評価が可能であると分かった。また、根拠と論拠を混同する生徒が多かったので、論拠について扱う際は、両者の定義を徹底することが成功のカギである。

(2) 「言語文化」A班 授業実践 〈季語をつくる〉

「言語文化」が重点を置く「読むこと」の領域において実践を行った。「現代の国語」と同じく、俳句の季語に関する教材文を使い、「言語文化」が「現代の国語」とは異なり、どのような資質・能力の育成を目指す科目であるのかについて研究した。言語活動として、実際に季語をつくることで言葉に対する理解を深め、ものの見方、感じ方、考え方を深めることを目標とした。

「主体的・対話的で深い学び」とするために、個人活動とグループ活動を交互に行いながら、季語を自作したり五感を使って季語を分析したりする学習を行った。それにより、今までとは異なる角度から言葉について考え、新たな見方を学ぶことができた。

実践を通して、「言語文化」の言語活動とは、生徒に今備わっている言語の力について改めて考え直す機会をもたせる活動であり、ふだんなじみのない言葉にも一旦立ち止まって成り立ちや奥行きを考え、それらを自らの内と外にある文化に結び付けていけるような活動ではないかと考えた。また「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、振り返りシートを用いた評価を試み、その結果と課題を明らかにした。

(3) 「言語文化」B班 授業実践 〈俳句に親しもう〉

(3)及び(4)は「言語文化」と「文学国語」との比較を通して、共通必修科目と選択科目のそれぞれにおいて育成する資質・能力の違いや、学習指導の在り方の違いについて明らかにしようとする実践研究である。

「言語文化」は社会人として生活するために必要な国語の資質・能力の基礎を身に付けさせることを目的としている。「言語文化」B班では、「言語文化」の「書くこと」に焦点を当て、生徒自身の体験を基にして俳句をつくらせるという活動を行った。松尾芭蕉の『笈の小文』（『あいち文学散歩』所収）を読ませ、俳句の背景、俳句に込められた感情などを解説した上で、ワークシートを用いて俳句作成させた。前半の俳句作成までが「言語文化」の範囲に当たる。この部分では、自身の体験とそのときの感情、その感情に合う季語を探させ、俳句作成の試行錯誤をする途中過程を残すように、消しゴムの使用を禁止した。その後の五七五の俳句に七七を付け加える部分は、他者の作品を読んで書く活動で、「文学国語」で扱うこともできる発展的な内容である。ここでは他者の感情を受け取り、自分の中で再構築する必要があるため、生徒の多くがより難しさを感じていた。本研究を通して、「書くこと」は知識及び技能の内容である「言葉の特徴や使い方に関する事項」にも強く影響を与えていることが分かった。

(4) 「文学国語」授業実践 〈描写を工夫して小説を書こう〉

「文学国語」と「言語文化」とはどのように異なるのかという問いを出発点とし、「書くこと」の単元の実践を通して、「文学国語」によって育成する資質・能力を具体的に確認する実践研究を行った。

「書くこと」の指導事項は、「言語文化」では自己の体験に根ざした表現であるのに対し、「文学

国語」は読み手を意識した「独創的」な文章の創作という発展的な内容である。そこで本実践では、郷土教材である諏訪哲史「市民薄暮」の作品構造を参考に、「わたし」が時空を超えて「ある人」と出会い、その意外な一面を知る物語を創作させた。その中で、課題を地の文に絞り、情景描写・行動描写を工夫させた。また、「主体的・対話的で深い学び」とするために、①登場人物「ある人」を選定・取材し創作意欲を高めること、②グループカンファレンスを行い協働で表現を工夫すること、③個別目標を設定し自己の学習を調整することの3点を工夫した。「1回書いてみると、作者がどんな気持ちを込めて書いているか、分かった」という感想には、創作による書き手の視点の獲得がうかがえる。創作体験によって文学的表現の必然性に気付くことは、「読むこと」の学びを深め、「文学国語」の目指す「感性・情緒」の育成につながると考える。

5 研究のまとめと今後の課題

今回の研究では、新学習指導要領国語科の「現代の国語」「言語文化」及び「文学国語」について、取り扱う文章を具体的に示した上で、領域等を絞って実践例を提案した。計4班の研究は、科目ごとの目標や内容の違いにも留意して実践が組み立ててあるので、班ごとの取組を比較することで科目の特性を見極めることが可能である。今後他の新科目についても実践を積み重ねていく必要があるが、その際、新科目が設置された正確な趣旨を把握し、新たな観点別学習評価の方法を、今後国から出される方針をよく理解した上で更に検証していかなければならない。

6 おわりに

教科・科目のねらいを踏まえた、生徒の資質・能力を確実に育成するための学習指導の在り方や、その成果を的確に測り、指導及び学習の改善に生かすことのできる学習評価の方法など、新学習指導要領の本格実施に向けて解消すべき課題は多い。そのような中で、本研究が今後の学校現場における授業改善に向けた取組のための足がかりとなることを期待したい。